

---

# ACE COMBAT 5 The Unsung War

KZK

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A C E C O M B A T 5 T h e U n s u n g W a r

### 【Nコード】

N 1 3 8 4 B A

### 【作者名】

K Z K

### 【あらすじ】

小惑星ユリシーズの飛来から数年、ユージアでのISAFと軍事大国エルジアとの戦争より5年ほど経過した2010年。オーシア連邦の最西部に位置するサンド島空軍基地にユニークな男がいると聞いて取材に来ていた記者のアルベル・ジュネットは訓練中の隊長機の後部座席にて演習をカメラに納めようとしていた。しかし、突然基地管制塔より無線連絡が入る…。

## プロローグ（前書き）

エースコンバットは是非映画にして欲しいゲーム作品の一つです。

今回は自分なりに物語をいじりながら投稿して行きたいと思います。

## プロローグ

15年前に戦争があった。

いや…戦争なら遙か昔から何度となくあった。

ベルカ公国と呼ばれるオーシアの北に位置するその国は、歴史上幾度となく南の土地を目指して侵攻を繰り返した。

運に恵まれぬ彼らに勝利が続くはずはない。

彼らは時代が変わったことに気付かなかった。

敗戦を繰り返しては領土を失い小国に戻りつつあった彼らは比類なき工業力を養いそれを武器に世界に向かって最後の戦いを挑んだ。

それが15年前の戦争。

彼らは猛々しく戦い、惨敗した。

迫りくる連合軍の侵攻を防ぐために自国の領土内で7つの戦術核を使うという愚さえ犯したベルカ人。

自らの町を蒸発させ、彼らは自らを北の地へと閉じ込めた。

その無残を目にした戦勝国たちは、自らの持つ武器を捨てようと心に誓った。

世界に平和が訪れた。

そして、それは永遠に続くものかと思われていた…。

あれから15年後の現在。

2010年9月23日、オースリア連邦、セレス海の孤島・サンド島。

平和から最も遠いこの島で平和を守って飛ぶ彼ら。

物語はここから始まる。

”レッドアラート!!”

その時私は空中にいた。

編隊長機の後席から

演習の光景をカメラに収めようとしていた。

前席が地上に向けて吠えている。

【F-4】の狭いコックピット内、上空5000mを飛行する10機の練習機編隊。

唐突に無線が開く。

”ピピッ”

「無茶言うな。新米の面倒見てんだぜこっちは。」

《通信指令室よりウォードッグ。不明編隊のコース、ランダース岬を基点に278から302。バートレット大尉。サンド島の貴隊にしか間に合わない。》

「っち。ベイカー。スヴェンソン。後ろにつけ。教官のみで侵入機を迎える。残りは低空へ退避しろ。」

《ベイカー。了解。》

《スヴェンソン。了解。まったく・・・今日は厄日だぜ。》

「無駄口叩くな。スヴェンソン。舌噛むぞ。」

編隊は二手に別れる。

「ジュネット。悪いが付き合ってもらっぜ。キツかったら寝ちまいな。」

大尉の宣告と同時に機体が唸り声を上げる。

世界がひっくり返り。

胃が裏返った。

「すまねえな。」

着陸後そんな場合でもないだろうに隊長は私に謝った。

通信指令室の犯したミスのために教官1名と練習生6名が戦死、さらに教官1名が着陸時にクラッシュ、計8名が死亡した。

この人の責任ではない。国籍不明機が躊躇いなく打ってきたのは……。

そして交戦の最中、練習生を逃がした場所が敵の真正面だったことは……。

交戦終了後、無事に基地へと戻れたのはたったの2機だけだった。



「あの07の機体。あのパイロットの反撃は見事でした。」

「見てられん……。ナガセ。あんな飛び方したら死ぬぞ!!。」

「…死にません。」

ただひとり生き残った新米パイロット。

ケイ・ナガセ少尉はささやくようにそう言った。

短髪黒髪の彼女の表情には交戦後の疲れが見える。

「虫も殺しませんって面してやがるぜ。」

呆れ顔のバートレット大尉。

そのまま格納庫へと歩きだす。

私は自分の愛機の側に佇む彼女にカメラを向けた。

”パシヤッ”

私の向けたカメラに彼女はわずかに微笑んだ。

しかし、その写真はカメラごと基地守備兵に取り上げられてしまった。

宣戦布告もなく行われた戦闘の証拠が拭われてゆく。

## プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

誤字脱字にはできるだけ注意してまいります。

極西の飛行隊 前（前書き）

今回はブレイズ視点です。

## 極西の飛行隊 前

国籍不明機との交戦から1時間後、ブリーフィングルームに練習生達が集められた。

目の前に座るのはこの基地唯一の教導官となってしまうたバートレツト大尉。

その表情には疲れが見える。

「おいアレックス。」

俺の隣に座るアルヴィン・H・ダヴェンポート少尉、お調子者でお喋り大好きな彼が唐突に話しかけてきた。

「いつもブレイズと呼べと言ってるだろ。なんだ？ダヴェンポート少尉。」

「かあゝ相変わらず堅いね。階級同じなんだから一々少尉なんて付けんよ。」

堅いとは余計な話だ。

「これは癖だ。」

親父が軍属だったこともありイマイチ砕けた話し方が苦手なのだ・。  
こればかりはしかたない。

「まあいいけどよ。それよりどつどつ思いつ？」

「何がだ?。」

「おいおい決まってんだろ。この陰気癖えブリーフィングについてだよ。」

まあそんなとこだろうな。先の戦闘で戦死した者たちについてはすでに敵命令がしかれている。

遺族に何も知らせられないのは辛いことだ……。が我々は軍人だ。割り切らなければならない。

しかしいくら軍人と言っても俺達も人間だ。仲間を失った悲しみはどうしても胸の内から滲み出てしまう。

まあ中には我解せずって奴らもいるが……。

「ふむ。おそらく次のスクランブルのメンバー編成を決める為だろうな。その証拠にここにいる連中は全員一等航空士以上の者が集まっているしな。」

「やっぱか。はあくダルイねえ。飛ぶのは好きだが、敵さんと命がけの追いかけてはごめんだね。」

「残りの機体数から見ると4機編隊のローテーションスケジュールになるだろうな。」

格納庫にある機体は隊長の【F-4】1機に訓練用【F-1】が4機か……。

「大尉を含めた計4人、成績重視でいくと俺とダヴェンポート少尉、あとは……。」

「あー。文句の山ほどもあるうが人手も足りん。」

先ほどまで椅子に座り上を仰いでいた大尉が急に話を始めた。全員の視線が大尉に集まる。

「明日からは新米共もスクランブル配置だ。上では俺のそばから離さん。」

予想道理。実践経験のない俺達にもスクランブルがかかってきた。

「ナガセ。」

「はい。」

ケイ・ナガセ少尉。先の交戦での唯一の生き残り……。

「お前は俺の2番機だ。目をつけてねえと何しでかすかわからん。」

大尉の言葉にナガセ少尉は顔をしかめた。

「残りの奴らについてはまずアルヴィン・H・ダヴェンポート少尉、貴様だ。操縦に遊びが見られるがその柔軟な機動は実戦で役に立つ。」

「お褒めに預かり光栄です。隊長殿。」

「ふつ。そして次に貴様だアレックス・レイ少尉。訓練下での撃墜記録並びに冷静な状況判断力から貴様を連れて行く。」

「以上が選抜メンバーだ。他の者たちは後日編成資料を配布する。ここままで何かあるか?。」

まあ妥当な選出だな。

「では、解散する。」

後日、2010年9月24日

### ブリーフィンググループ

「諸君、楽にしまえ・・・と言いたいところだがそうもいかん。由々しき緊急事態である。ブリーフィングを進める。」

丸々と太った中年男。我らが基地司令ことオーソン・ペロー中佐より任務概要が告げられる。

『オーシア連邦領空に再び国籍不明機が侵入した。国籍不明機は警



告したにもかかわらず領空侵犯を続行したため、オーシア海岸警備隊がSAMを既に発射した。ミサイルは国籍不明機に命中したが、撃墜には至ってない。被弾した機は一転洋上への離脱を目指し、高度を下げつつも依然として飛行中である。国籍不明機を捕捉し正体を解明するため、地上へ強制着陸させよ。なお、許可あるまで発砲は禁ずる。」

ブリーフィング終了後パイロットスーツに着替えた俺は廊下で偶然ナガセ少尉とであつた。

「確かケイ・ナガセ少尉だったな。俺はアレックス・レイ。階級は少尉。コールサインは”ブレイズ”だ。ブレイズと呼んでくれ。」

「ブレイズ……。私のことはご存じの様ね。」

「いや。知っているのは名前と階級、そして練習生唯一の実戦経験者と言うことだけだ。」

「そう。なら一応こちらでも自己紹介しておくわ。ケイ・ナガセ少尉。コールサインは”エッジ”よろしくね。」

「ああ、此方こそよろしく。」

俺達は互いに握手した。自分で言うのもなんだが悠長なことである。

「では急ごう。ナガセ少尉、大尉より先にいかなければ……。後が怖い。」

「ええ。」

そして俺達はその後の会話もなく格納庫へと足を進めた。

ちなみに格納庫にはすでに大尉の姿があり、軽いお叱りを受けてしまった。

その後ダヴェンポート少尉とのくじ引きで俺は編隊の4番機となった。

## 極西の飛行隊 前（後書き）

自分の中でのブレイズはお堅い感じですが、  
皆さんはどうですか？

極西の飛行隊 後（前書き）

今回はチョッパー視点です。

## 極西の飛行隊 後

天候は快晴。青空の下を4機の機影が通り過ぎる。

【F-4E】の後ろを【F-5E】3機が追順して飛ぶ。上から見るときれいなひし形を描いているはずだ。

現在時刻は午前11時01分。

《こちらウオードッグ、”ハートブレイク・ワン”。これより目標に接敵する。》

隊長機からの無線連絡に対し空中管制機からの返信が来る。

《こちら空中管制機”サンダーヘッド”了解。強制着陸させよ。ウオードッグ各機発砲は禁ずる。繰り返す発砲は禁ずる。》

発砲は禁ずるねえ。仲良く敵さんと遊覧飛行ってか？。そいつは愉快な話だな。

機体制御に専念しながらオレそんなことを思っていた。

《聞いたな、ひよっこども》

《2番機、了解。》

おっといけね。

「3番機、了解。」

《・・・4番！どん尻、おい、聞こえてるか、”ブービー”？。ち

やんとついて来てるか？最後尾！》

《・・・4番機、了解。》

《返事だけは一人前だな、離されるな。》

あーあー。ブービーだって。

こりゃ傑作だ。

「やれやれ、俺あ今回クジに勝つて3番機でよかつたぜ。」

《黙れ、アルヴィン・H・ダヴェンポート少尉。お前も何かあだ名で呼ばれたいのか？。》

おいおい変なのは御免だぜ。

「自分は呼ばれるなら”チョッパー”であります。それ以外では応答しないかもしれないであります。」

《それは実にお前らしい呼び名だが、俺は心の中ではもっと別の名でお前を呼ぶ。いいか？。》

はあ。

「勘弁してくれよ！」

《お客さんだ、ゆくぞ。》

隊長機がいきなり進路を変える。リーダーには確かに不明機を捉えてるみたいだな。

隊列崩すと何言われるか分かったもんじゃないねえ。

他の連中も考えは同じらしい。隊長にピッタリくっついてる。

《許可あるまで発砲は禁止する。いいか?。》

《4番機、了解。》

《よし、いい子だ。》

ブービーの奴、もう同じ轍は踏まないってか?。

確かに賢明な判断だね。

オレたちの編隊はそのまま海上へ逃れようとする国籍不明機に接近していった。

だんだん機影が見えてくる。

つてありやブラックバードじゃねえか!?

よくSAMがあたったもんだぜ。

《おしゃべり小僧チヨッパー。》

いきなりのご指名である。

「うっ。オレのあだ名はそれかい。」

まったく。小僧は余計だっつーの。

《お前は漫談の才能がある。ひとつ、降伏勧告をやってもらえんか?。》

はあ？なんつだそれ？  
メンド癖え。

「どうかご自分で。」

《俺は人見知りの癖があつてなあ。》

どの口がほざきやがる。

「ちえつ。あー、あー。国籍不明機に告ぐ。我々の誘導にしたがつて進路をとれ。」

《いいぞお。》

へん。

「あー、最寄の飛行場へ誘導する。了解したらギアダウンしろ。」

”ピピピッ”

《警報！さらに数機の国籍不明機が接近。方位280、高度6000！。高速の小型機4機！。命令あるまで発砲は禁ずる！。》

ああ！？また来たのか？？

サンダーヘッドからの無線連絡。

《海を越えて偵察機の帰還援護に来るとは、殊勝シキトウな奴らだ。それでこそ戦闘機だぜ。》

隊長はやる気のようにである。



《それ、方位280！ヘッドオン！！。》

隊長機に合わせて俺らも機体を調整する。  
4機か……。

《いいか、俺がいいというまで発砲はするんじゃないぞ。》

《2番機、了解。》

「3番機、了解。」

《4番機、了解。》

《よし、いい子だ。》

敵の機影が見えて来た。

”ビービ”

ミサイルアラート！？

「撃つて来たぞ！」

急いで機体を旋回させる。どつちやら誘導性はあまり高くないらしい。  
機体を安定させつつ様子を伺う。

《命令あるまで発砲は禁ずる。》

はあ！？なに言ってるやがる！！？

「ふざけんな！向こうは実弾じゃねえか！戦闘機だぜ。」

《喋ってねえで降りかかる火の粉を払え。》

《了解、ブレイズ”FOX2”！。》

おいおい！？ブービーの奴がかましやがったぞ！。

放たれたブレイズのミサイルはそのまま敵機の右翼に命中。敵はそのまま墜落していった。

《こちらサンダーヘッド。バートレット大尉それは命令違反だ！。》

アラートが鳴り響く。クッソ！ケツにつかれてる。

《阿保！これ以上部下を殺させねえんだよ。》

《エッジ、交戦！》

《ブービー、全部墜とすぞ！。》

《ブレイズ、了解。》

急旋回しつつ敵機を撒く。

なんとか振り切った。

「戦果ってあげていいのか？、やっちゃうぞ、オレ。」

《やってみな。》

さてと……。隊長の許可も下りたし。いっちょやりますか!!

「FOX2」!

放たれたミサイルは敵機のエンジンに命中、そのまま爆散した。

悪く思っなよ……。

《命令あるまで発砲は禁ずる!。》

《応戦します。》

「ヒューッ」

やるなーナガセの奴。サンダーヘッドも一発沈黙だぜ。

《敵偵察機墜落!》

《残念だな、力尽きたか……。》

まあやつこさんSAM食らって煙吹いてたしな。

《逃がすな。よく狙え。》

《射撃中止!》

へいへい。しつこいなあ。

もはやサンドヘッドに耳を貸すものはない。

「思い残すことがあるとすれば……。オレはもっとやさしい隊長

の下で飛びたかったよ。」

《ウォードッグ、発砲は禁ずると命令した。命令を守れ。》

《発砲は禁ずる。繰り返す。発砲は禁ずる。》

《1機撃破。》

ナガセの奴もやりやがったな。

「機数4、早急に駆逐せよ。」

敵の増援4機。

それに混線か。

《3番機、酔いどれみたいにぶらついてるぞ。》

「ち、ちくしょう……」

こつちとら敵2機に追いかけてらんだよ。

「ここは敵地だ。十分に注意して確実に仕留めろ。」

おーおー容赦ねえぜ。

オレは機体のピッチを下げ海面を目指す。

手持ちのUGBを海面へ向け投下しピッチを上げた。

跳ね上がる海水に視界を遮られ、敵はそのまま海中へとダイブした。

「へへへっどんなもんよ。」

《まだ終わってねえぞ。》

どうやら1機残ってたようだ。

《ブレイズ、FOX3》

だが残った1機もブレイズの機関銃に蜂の巣にされ、爆散した。  
リーダーに敵の機影はない。

《ハートブレイク・ワンから各機へ異常はないか?。》

《4番機、異常なし。》

《2番機、異常なし。》

「3番機、問題なしだ。」

《よし、いいぞ。》

《すべての国籍不明機の撃墜を確認。》

《みんな生きてるな。よし、いい子ちゃんたちだ。4番機、ちゃんとついて来てるか?。よし、全員生還の今日の良き日の記念に、今後、編隊内のどこにいてもお前のことはブービーと呼ぶ、いいなわかったな。》

「やれやれだぜ。」

こりゃブレイズの奴もさぞお疲れのご様子だな。

そんなことを考えながら俺たちの初任務は全員生還で幕を閉じた。

『中央より緊急通達命令』

サンド島基地隊員各位：

- 1．今戦闘に関連する一切の口外を禁ずる。
- 2．サンド島分遣飛行隊長ジャック・バートレット大尉、基地司令部へ出頭を命ずる。

S e p . 2 4 , 2 0 1 0

発令：E O 1 1 1 2 0 7、オースリア国防軍中央本部』

極西の飛行隊 後（後書き）

上手くかけていたでしょうか？

戦闘描写が少なく申し訳ありません。  
まだ不慣れなものです・・・。

感想があればうれしいです。

**S h o r e b i r d s (前書き)**

今回はまたジュネット視点です。



## Shorebirds

国籍不明機の墜落は伏せられた。撃墜したのは空飛ぶ円盤だったという噂さえ流れた。

公式にはまだ世界は平和のうちにある。

最初の空戦を目にした私は島を出ることが出来ない。

夕焼けに照らされる格納庫の一角で二人の男が話し込んでいた。

「<sup>けんせき</sup>譴責なんて珍しくもねえ。いつまで経っても万年大尉さ。」

紅く照らさせた滑走路を眺めながら彼、バートレット大尉はささやいた。

私は近くのベンチに腰を下ろし、静かにその話を聞く。

「戦争を伏せるのは何者でしょうか?。」

「あんな、この海に向こうっていやーユークはムルスカの航空基地つきゃねえんだぜ。」

「ユークトバニアは前の戦争の友好国じゃないですか。」

「だからよ、あっちの中で何が起こってるのか今ごろ<sup>しかりき</sup>釈迦力になって確かめようとしてる連中もいる。」

「ホットラインがじゃんじゃかなってるはずだぜ。この国のどこか

では。」

「いたずらに庶民の敵愾心煽るのが政治の仕事じゃねのさ。」

親密な表情でバートレット大尉は話を進める。

「ただな、軍人の石頭に理想は通じねえ。奴らが口をつぐめと一言いやあこの有様だ。」

「あんたには、すまねえことだけでもよ。」

申し訳なさそうにする大尉。  
別に彼の責任ではない。

「いや、あなたたちと居られるからいい。」

「いちばん撃ちたくないのは隊長なんだよ。」

不意に後ろから声を掛けられる。  
振り返るとそこにはこの基地の”おやつさん”ことピーター・N・ビーグル整備士がいた。

「隊長にはユークに恋人がいたのさ。」

懐かしむように話すおやつさん。  
そんな彼に大尉が答える。

「なあに、古い戦争の傷跡さ。」

そうて彼が向けた視線の先には切り裂かれたハートのAのランプ。

彼のコールサインであり、そんな彼のエンブレムが儂く夕焼けに彩られていた・・・。

**S h o r e b i r d s (後書き)**

短めですいません。

感想あると嬉しいです。

## 開戦（前書き）

今回はプレイズです。

## 開戦

2010年9月27日ブリーフィングルーム

『このサンド島沿岸に、国籍不明の不審船が接近するのをリーダーが捉えた。また、当該船舶から無人偵察機（UAV）とみられる物体が射出されたことも確認されている。偵察活動を終えた無人偵察機（UAV）は、回収されるために不審船へ戻るものと予想される。回収される前に無人偵察機を捕捉、破壊し、その偵察活動を阻止せよ。なお船舶への攻撃は許可あるまで禁ずる。』

「以上が本日の作戦である。ウォードッグ隊は直ちに発進準備にかかれ。」

基地司令の命令とともにプロジェクターが解除される。

ブリーフィングルームのカーテンが開けられ、外から光が入ってくる。

「さてと、お前たち、今回は無人機が相手だ。苦戦するほどの相手じゃねえ。が、用心にこしたことはねえ。気合いれてけよ。」

それだけ言うと我らが隊長、バートレット大尉はブリーフィングルームを出て行った。

「じゃ、オレらも行きますか？。」

「ああ、さっさと終わらせてしまおう。」

「そうね。」

俺たち新米3人組はそれぞれのロッカールームへ足を運んだ。

サンド島上空。

いつもの編隊で飛ぶ俺たちに通信が入る。

《サンダーヘッドよりウォードッグ。情報収集船に戻る無人偵察機あり。回収を許すな。空中で撃ち落とせ。》

《あいよ。聞いたな、野郎ども。》

《エッジ、了解。》

《こちらチョッパー、了解。》

「ブレイズ、了解。」

《よし、いくぞ。》

4機の編隊がUAVが飛行中の区域へ向かいスロットルを上げていく。

《船には発砲するなどのお達しだ。いいな。》

「問題ありません。」

《そつだ、無人偵察機だけを狙え。ブービー！。お前のお手並みを拝見させてもらうぞ！。》

そんな隊長のお達しに思わず口元が緩む。  
いいだろう、お見せするさ。

俺はスロットルをさらに上げる。

編隊最後尾からバレルロールしながら前衛へおどりだす。

後ろから隊長たちの視線を感じる。

UAVが見えて来た。

UAVは編隊で飛行しているようだ。

2機編隊2つに4機編隊1つ、合計8機か。

「ブレイズ、交戦。」

俺はまず2機編隊の最後尾を飛行中のUAV後方に回る。



機関砲のロックを解除。

「ブレイズ、FOX3!。」

機体に装備された20?機関砲M61が唸りを上げ火を噴く。UAVはあっという間に蜂の巣になった。

そのまま次のUAVに向けミサイルを放つ。命中したUAVは爆散した。

《ブービー、どうだ。この位なら楽勝だろう?。》

「ええ、問題ありません。」

《ふつ。さつさと片付けるぞ。》

隊長たちもすでに自分たちの獲物に喰らいついている。

《標的射撃でもしてるみたいだぜ。》

余裕を感じさせるダヴェンポート少尉。

そんな彼の獲物にすれ違いざまに機関砲をお見舞いした。

《おい!ブービー、俺の獲物まで横取りするなよ!。》

「おこぼれはだせない。さつさと仕留めることだ。」

《まったく。。。しかし、人が乗ってないのが救いだな。》

「ああ。」

《おかげで、気兼ねなく墜とせるからな。》

”ドンッ”

機体の爆散音。

隊長とナガセ少尉がそれぞれ撃墜したようだ。  
これで残り3機。

《目標は小さい。仕損じるな。》

隊長の激が飛ぶ。

言われなくてもな。

俺は編隊から外れたUAVに接近する。

ダヴェンポート少尉も次の獲物に接近しつつある。

《偵察機の次は無人機ってわけか。妙な避け方しやがる。》

そう言いつつミサイルをお見舞い。

敵機を破壊した。

「だが、所詮無人機だ。」

俺はUAVのエンジン部に機関砲を当てる。

燃料に引火しUAVは鉄くずになった。

もうレーダーにUAVは映っていない。

《警報！国籍不明機多数の接近を探知。》

空中管制機からの無線連絡が入る。

《このあいだと同じ方位か?。》

《方位280、同じだ!》

《向こうはどれだけの数を国境にそろえてんだ。こっちはこの4機つきりだぜ。そら、退避しろこつちだ。》

隊長に合わせて退避行動に移る。

《俺のケツについて来れるか?。》

「問題ありません。」

ふりかかるGを感じながらスロットルを上げていく。

《間に合わねえよ、追いつかれる。》

《今日のどん尻はお前か、ロックンローラー。待ってる今助けてやる。》

《今日はくじ引きでまけたんだああ!。》

言うや否や隊長は急旋回を始める。

旋回はただでさえGを強く感じると言うのにそれをほぼトップスピードの状態から入るとは……。改めて隊長のタフネスさに感心する。

《お前らも見てねえで降りかかる火の粉をさっさと払え。》

「ブレイズ、了解！」

《エッジ、了解。》

《心配するな。いつもの訓練通りにやればいい。》

そう言いつつ次々と敵機を墜としていく隊長。

《バートレット大尉！！。》

空中管制機から遠吠えが聞こえる。

《隊長の後ろに1機。撃墜します。》

隊長に喰い付いていた敵をナガセ少尉のミサイルが襲う。

《ほいよ。やるじゃねえか。》

《攻撃確認、反撃します。》

ヘッドオンからの攻撃を回避、そのまま敵の後ろにつく。  
大した度胸だ。

《エッジ、交戦。》

《ハートブレイク・ワン、交戦。》

《チョッパー、交戦。》

「ブレイズ、交戦。」

《ウォードッグ、交戦許可はまだ出してない!。》

《ブービー、全部墜とすぞ!。》

「了解。」

俺は機体を反転させる。

「敵部隊、反撃を開始!」

すれ違いざまに20?弾をお見舞いする。

”ドーン”

《交戦許可無しで撃墜だと?。何を考えているんだウォードッグ!。》

《グッドキル、ブレイズ!。》

「ああ!!。」

体が熱くなる。だが頭は冷静に。

《オレもまけてらんねえぜ。》

ダヴェンポート少尉はそのままミサイルを放つ。

ミサイルは敵機のコックピットに命中。即死である。

《さっきのドローンの仕返しってわけか?。》

少尉は後ろの敵2機を撒きながら無線を飛ばす。

《どこから来たんだ？。このあいだの奴らの仲間か？。》

「方位280からの飛来。おそろくな。」

俺はダヴェンポート少尉の後ろにつく2機に向けミサイルを放つ。  
1機は炎に包まれ、もう1機は回避した。

「ちっ」

回避した敵が反撃してくる。

敵の20？弾が機体の近くを通り過ぎていく。

「はあ、はあ、はあ」

操縦桿が重い。少しでも気を抜いたらやられる。

《こっちだ！ブービー！。》

視界に隊長機の姿を捉える。

俺は隊長とのクロスレンジに機体を合わせる。

………今だ！。

俺は機体ピッチを上げる。

すると機体の船底を隊長が放った弾丸が通り過ぎる。  
通り過ぎた弾丸は敵機体に突き刺さった。

”ドン”

「はぁー、はぁー」

何とか俺は呼吸を整える。

《すべての戦闘機の撃墜を確認。》

終わったのか？。

《警報が解除にならない。引き続き対空警戒を怠るな。》

《気をつけるナガセ！。敵は下にもいるぞ！。》

隊長の忠告と同時に敵船舶からSAMが発射される。

SAMはそのままナガセ少尉の下へ向かっていく。

《!?!、くっ!?!》

機体を急旋回させるナガセ少尉。

そこに隊長が機体を滑り込ませ、ミサイルの標的を変更させた。

機体をロールさせ、時間を稼ぐもミサイルは隊長機の右翼に命中した。

《隊長!?!。》

ナガセ少尉が叫ぶ。

隊長の機体はだんだん高度が下がっていく。

《ばかつ、涙声なんか出すんじゃない。ちよっくらベイルアウトするだけだ。機体なんざ消耗品。搭乗員が生還すりゃ大勝利だ。救難

へりと俺の予備機の整備の手配、頼んだぜ。》

”パシユツ”

煙を上げる機体からパイロットが射出される。

「こちらブレイズ、パラシュートの開散を確認。」

《警報！警報！、ウォードッグ全機、至急基地に帰還！》

《救助へりの到着がまだです。》

《救助隊に任せろ！。基地で燃料弾薬を補充して再発進！。敵は宣戦布告した。》

《何だつて！？》

宣戦布告？。また戦争が始まるのか……。

「ブレイズ、了解。」

《ブレイズ！。》

《おい！ブービー！。》

「隊長なら大丈夫だ。あの人のタフさ。俺たちが一番よく知っている。今は俺たちに来ることをやろう。」

《……OK、わかったよ。チョッパー、了解。》

《……エッジ、了解。》



俺達は次の作戦行動のため基地への帰還を開始した。  
出撃前と違い、3機の編隊となつて……。

『無人偵察機および武力行使をした国籍不明機は撃墜された。』

国籍不明の不審船は領海域から離脱、偵察活動は阻止された。

作戦中に撃墜されたバートレット大尉の捜索は、周辺海域の安全の確認を行い次第開始する。

なお、ユークトバニア連邦共和国は、我がオースリア連邦に対する宣戦布告を行った。』

## 開戦（後書き）

この回はナガセ視点で書いてみたかんですが、やはりブレイズにしました。

このころからリーダーシップを発揮させていた感じにしたかったからです。

感想あるとうれしいです。

## Narrow Margin (前書き)

今回はジユネット視点です。

## Narrow Margin

広さおよそ8畳の二人部屋。窓のそばには2段ベッドとソファ。入口近くにはPC備え付けのデスクと小物棚が宛がわれている。

ここは私が軍に用意された部屋。

または牢獄。

牢獄と言ってもどこぞの囚人のような扱いを受けているワケではないのだが。

「搭乗員宿舎 9月27日 12時05分」

現在、私の部屋には電話をしている人物がいる。

ハミルトン大尉。

私を閉じ込めた基地司令官の副官にしては話の出来る男だ。  
私のカメラも彼が取り返してくれた。

伯父が軍人でなかったら私のような職業に就きたかったといって。

今は電話が終わり何やら考え事をしている。

「たった今、あなたを閉じ込めてた理由がなくなったよ。」

「えっ？」

「ユークトバニアが宣戦布告した。宣戦同時攻撃だ。セント・ヒュ  
ーレット軍港が空襲を受けている。」

彼はそう私に伝えると足早に部屋を出て行った。

窓の外から戦闘機のエンジン音が聞こえる。

ブラインドのむこうの滑走路には離陸していく彼らの姿が見えた。

「彼らは3機しかない?。」

飛び立つ【F-5E】の機影を見ながら私は思わず呟いた。

## Narrow Margin (後書き)

短めですいません。

次回はいよいよ本格的な開戦です。

感想があると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1384ba/>

---

ACE COMBAT 5 The Unsung War

2012年1月6日00時51分発行